

小学校教員免許取得に係る科目「体育科教育法」における

学生の課題に関する一考察

住本純

SUMIMOTO Atsushi

本論文は、小学校教員免許取得に係る科目である「体育科教育法」における2015年度授業実践報告とその授業実践において学生が直面した課題に関して考察を行ったものである。この「体育科教育法」では、小学校体育授業を計画・実践するための基礎的知識と技術の習得を目標としている。授業前半では、体育科の学習指導要領等の基礎的知識や指導方法についての理解を深めた。授業後半は、体育授業の教材作り、模擬授業、模擬授業後の省察に取り組んだ。そのような一連の授業展開の中で、どの段階・部分で学生が課題を抱えたのか学生自身が記した授業記録から考察をした。併せて、学生が模擬授業後にどのようなことに焦点を当て省察したのかを報告する。

キーワード：教員養成、体育科教育、模擬授業、省察

1. はじめに

現在、我が国では、グローバル化や情報化等の高度化した社会問題への対応が必要となっている（中央教育審議会, 2012）。これに対応し、学校教育においても、社会からの尊敬・信頼を受ける教員、思考力・判断力・表現力等を育成することができる実践的指導力を有する教員、困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する教員が求められている（中央教育審議会, 2012）。

上記の状況を踏まえ、実践的指導力を育成する教員養成プログラムが重要になってきていることは言うまでもない。その中で、小学校教員養成段階の体育科にスポットを当ててみると、現時点において、教育職員免許法上では、小学校教員免許取得のために取得すべき体育関係の単位はきわめて貧困である。この事情は、海外でも同様に指摘されている。Harris (2012) は、小学校教員養成の体育授業力量形成にかかる時間の少なさが、体育授業を行う力量形成にネガティブに機能しているという指摘をしている。

そのような経過から近年、国内外において専門職としての教員の体育授業力量形成やその形成過程に関する研究が重要になっており、体育授業を担当する力量を向上させていく要因の解明や体育授業力量形成に必要な支援や養成プログラムの検証に関する知見の蓄積が求められている。

そこで本研究では、実際に行った小学校教員免許取得に係る「体育科教育法」の授業実践を報告し、受講者である学生がどのような課題に直面したのかを明らかにする。その課題を明らかにすることは、「体育科教育法」における、体育授業力量を向上させる授業プログラム作成に向けた有効な知見となるだろう。

他方で、学生自身が模擬授業後、どのようなことに焦点を当て、省察するのかを明らかにすることで、学生の体育授業に関する興味関心や観察ポイントを報告できると考える。その知見は、上記同様、効果的な授業プログラムを開発する一助になると考えられる。

2. 方法

調査期間：平成27年4月10日～7月24日
 調査対象：小学校教諭2種免許取得に係る科目「体育科教育法」履修者・短期大学2回生12名
 収集データ：学生自身が記した授業記録
 各自の指導案、グループ指導案
 模擬授業後の省察記録

3. 授業展開とシラバス

表1. 2015年度前期「体育科教育法」シラバス

科目名：体育科教育法
単位（授業形態）：2単位（講義・選択）
担当者：住本 純
テーマ及び授業の目標
テーマ：体育授業のVTR視聴や実践を通して、小学校の体育授業の実践力を養う。
目標：児童にとって意味のある「よい体育授業」を計画、実践するための基礎的知識と技術の習得、授業づくり・教材づくり・観察分析及び評価法の要点を理解する。
授業の概要
体育授業の実践を交えながら、体験的に学習指導要領の目標や内容、各領域の指導方法に関する知識や技術の習得を行う。
全体の授業計画・内容
1. ガイダンス、学校体育の現状、小学校体育科の目的
2. 体育科の目標論と教育課程論：学習指導要領の内容
3. 体育授業における教材づくり、学習指導方法論
4. 体育授業の観察・分析・評価
5. 体育の授業づくり論：単元計画、指導案の作成
6～10. 各領域の実践を通じて、指導方略と指導技術を学ぶ
11～14. グループ毎による指導案作成と模擬授業
15. 本講義のまとめ
*内容は授業の進捗状況によって変更する場合がある。
学習の方法
予習のあり方：次回の授業内容について、学習指導要領を確認しておく。
学習のあり方：体育授業を指導する立場を想定しながら、授業に臨む。
復習のあり方：留意点や重要なポイントについて、振り返る。
成績評価
授業態度（50%）、提出物（指導案など）（30%）、模擬授業（20%）
テキスト
文部科学省 『小学校学習指導要領解説 体育編』 東洋館出版社
参考文献
高橋建夫ほか 編著 『新版 体育科教育入門』 大修館書店
高橋建夫 編著 『体育授業を観察・評価する』 明和出版

表1で示すように、授業前半において、体育科の歴史や成り立ち、内容論、指導論、評価論についての知識を深めた。その上で、現行の学習指導要領についての領域構成や要点を講義と実技を交えながら学習した。その後、学生を4グループに分け、領域を選択し、「教材作り→指導計画作成→指導案作成」という流れで話し合いを進めた。そこでまとめられたものを模擬授業

として取り組んだ。1グループ3名だったので、45分の授業を3分割し、1人15分を受け持ち、模擬授業を行った。模擬授業前には、単元の流れや教材の意図等の説明を行った。模擬授業後は、教師役の学生が授業の反省を発表した。最後に、各自が「授業についての感想」「参考にしたい点」「改善点」などの項目があるワークシートに省察することとした。

4. 考察

表1のように授業を展開していく中で、どのような場面で、学生は課題に直面したのかについて、収集データから考察していきたい。

まず学生が直面した課題として挙げられたのは、①評価の方法を知らないために技能評価に偏重してしまう点、②正しい技能評価ではなく自分の価値判断で技能評価してしまう点である。

例えば、体育授業で児童をどのように評価していくかを学生に問うてみたところ、ほとんどの学生が技能の観点のみに集約し、意見を述べていた。また跳び箱の授業で児童を評価する場合は、高い段数の跳び箱を跳ぶかどうかのみで評価をきめてしまう。運動技能が高いか低いかで評価の焦点を当ててしまっていたのである。そこに、学生が抱えた課題が見られた。以下は学生の授業記録である。

運動ができるかできないだけじゃなくて、評価の観点として、器具の片付け、ワークシートなども評価をしていくことは初めて知った。

技能の評価だけで、評価されていると思っていた。

運動のできることを、ただ足が速いとか高く飛ぶとか、投げるボールが速いとかで決めていた。

この「技能評価を偏重する」、「間違った視点の技能評価をする」といった課題は、学生自身が受けてきた体育授業経験を要因としていることが推察できる。なぜなら、授業における信念というものは、児童生徒として受けてきた授業経験により構築されることが先行研究からも示されているからである（秋田，2000）。このような課題には、感情や思考を揺さぶられる経験が必要（秋田，2000）とされている。そのため本授業では、実際に3段の跳び箱と5段の跳び箱を跳んでもらっ

た。3段の跳び箱を跳ぶことの方が難しく、恐怖心も出てくるのである。このように、その運動領域の内容や特性を理解していないと正しい技能評価も不可能となることを伝えた。この体験をすることにより、学生が持っている跳び箱は高い段数を跳ぶことの方が良いという固定観念を崩すことができた。また「技能評価に偏重する」課題には、実際に技能評価だけで評価する授業を児童役として授業を受けてもらった。自分の技能的課題を達成後は、何をしてもいい授業である。学生自身、この授業を受けた後、下記の感想を述べていた。

今日の授業は、授業といえないような気がした。

上記の感想に集約されているように、技能評価だけでは授業は成り立たない。学生自身が技能評価に偏重する授業を体験することにより、体育授業の学習内容には、技能面だけではなく、態度面や認知面を指導評価する必要性を感じることができたと考えられる。

このように学生が直面した課題に対応するためには、学生自身が体験し、固定観念を崩す授業展開が重要になることがいえるだろう。

次に、学生が直面した課題として明らかになったことは、ゲーム・ボール運動領域の教材づくりにおいて、既存のスポーツ種目を教材にしてしまうことである。現行の小学校学習指導要領は、ボール操作、ボールを持たないときの動きや類似するゲームの様相から、中学年より、ゲーム・ボール運動を「ゴール型(ゲーム)」、「ネット型(ゲーム)」、「ベースボール型(ゲーム)」(注1)と3つに分けている。「ゴール型(ゲーム)」といわれるものは、サッカーやバスケットボール、ラグビー等を基にしたゲームを指している。「ネット型(ゲーム)」は、テニスやバレーボール等を基にしたゲームであり、「ベースボール型(ゲーム)」は、野球やソフトボール等を基にしたゲームを指している。ゲーム・ボール運動領域における教材としては、既存のスポーツ種目を素材としながらも、発達段階に合うように人数を制限したり、ルールを工夫したりと易しいゲームや簡易化したゲームを教材として考えることが必要である。しかし、学生は既存のスポーツ種目のルールや道具を使用することに固執するという課題を見せた。特に、部活動や社会活動でスポーツを経験してきた学生ほど固執してしまっている状況だった。以下は学生の教材作りワークシートから抜粋したものである。

対象学年: 3年生
教材名「サッカー」
学習内容(コート内で攻守入り交じって、ボールを手や足で操作したり、空いている場所に素早く動いたりしてゲームをする。)
ルール……8人対8人、手を使ってはいけない、キーパー1人
用具……サッカーボール、サッカーゴール

対象学年: 5年生
教材名「バレーボール」
学習内容(ボール操作についての制限を緩和したボールがつながりやすい状況の中で、相手が捕りにくいようなボールを打ち返すことができるようにする。)
ルール……6対6、三回以内で相手にボール返す、サーブは1回 ボールがネットにかかったり、地面に落ちたら相手の得点
用具……バレーボール、バドミントンコート、ネットバドミントン用

先ほどと同様に、学生自身が児童生徒で経験してきた体育授業が影響を与えていることが推測できる。また現場経験のない学生にとって、小学生がどの程度の運動能力や認知能力であるかというような発達段階をイメージして、教材作りを行うことが困難であることが指摘できる。実際、学生自身がワークシートに書いたような教材を用いて、学習指導要領に伴う学習内容を児童に指導することは困難である。学生が提示した教材よりも、易しく・簡易化した教材が求められる。しかしながら、ただ単に易しく・簡易化した教材では、体育授業は成り立たない。そこに指導要領で示された、子どもたちが学ぶべき学習内容が含まれていなければならない。その点を留意して、学生の抱える課題に対応した授業プログラムを構成していくことが重要になってくるだろう。

最後は、指導案作成で直面した課題である。

小学校では、体育授業の評価観点は「技能」、「態度」、「思考・判断」である。子どもたちをこの観点で評価するためには、観点別に対応した指導を行うことが必要である。所謂、指導と評価の一体である。しかしながら、学生の指導案には、評価規準としては上記の3観点が記載されているのだが、どこでどのように評価するかが明示されていないのである。模擬授業の本時案であっても、同様のことが指摘できた。また明示されていても評価規準と指導内容がリンクしていないと

いう課題も明らかとなった。以下が指導案からの抜粋である。

<評価規準>として記載されていた内容 運動に対する思考・判断 1、ゲームに応じた簡単な作戦を立てたりすることができる。



本時案で評価として明示されていた内容 ・話し合いは、全員で決めているか。

評価規準の「思考・判断」で挙げられている内容は、指導要領に準拠した内容を記載している。しかし、本時案に評価内容として示されたものは「態度」の内容といえるものとなっており、ここに齟齬が生まれている。そのようなことから指導案作成にあたっては、授業中における評価を考えさせる場合には、設定した評価規準の内容からずれないことを留意して、学生に指導していくことが重要になるだろう。

5. 模擬授業後の省察内容

ここでは、模擬授業後に学生がどのような内容を省察したかについて報告する。表2にどのようなことに焦点を当てて省察行ったか数値で示した。模擬授業を4回行い、毎回、教師役、児童役に限らず、全員にワークシートを提出させた。合計は、41枚であった。3つの質問項目ごとに振り分けを行った。

表2. 省察内容とその記載回数

省察内容	記載回数
授業の雰囲気	47
指導方法	32
教材内容	24
指導案の書き方	13
その他	7
合計	123

具体的な学生の省察は以下である。

<授業の雰囲気>

- ・楽しくプレイすることができた。
- ・指導者の一生懸命さが伝わり、より楽しむことがで

きました。

- ・ジェスチャーするのが恥ずかしくて上手くできなかったけど、進んでいくうちに楽しくなった。

<指導方法>

- ・声のメリハリや子ども一人ひとりへの目配りが少なかったように感じた。
- ・実習の経験を生かして、声かけや授業の進め方などがとてもスムーズだった。

<教材内容>

- ・バレーが苦手だけど、ソフトバレーなら上手、下手が見えないから、この教材を利用したことがすごいと思った。
- ・ピッチャーが一塁と二塁の間にいるのは少しやりにくかったです。

<指導案の書き方>

- ・指導案も見やすく良かったです。
- ・指導案の書き方が気になりました。

<その他>

- ・笑顔がかわいかった。

表2や上記の具体例から示されたように、模擬授業が盛り上がったかどうか、楽しかったかどうかという授業の雰囲気や勢いに焦点を当てることが多かった。そのため、模擬授業後の指導講評する場面で、指導方法や教材内容について学生に問いを投げかけ、それらに焦点化した話し合いを行う時間を設けた。意図的に指導方法や教材内容に関心を向けさせることで、省察での指導方法や教材内容への指摘が徐々に増えたと思われる。この点は、先行研究でも同様に、模擬授業の回を追うごとに指導方法の指摘や授業改善の提案を省察で述べる傾向にあることが指摘されている(岸, 2013)。加えて、近年の体育科教育学分野の先行研究を概観してみても、上記と同様に模擬授業後に省察を行うことの重要性は多く指摘されている(藤田ら, 2011; 廣兼, 2012)。このような先行研究からも、模擬授業後に学生自身が省察を行い、体育授業の内容に焦点を当てた省察が増加したことは、本実践の「体育科教育法」における授業成果といえるだろう。しかしながら、評価に関する省察がほぼ見当たらなかったことや教材内容や指導方法、指導案の書き方に対して、具体的な改

善点の指摘が少なかったことは今後の課題である。

6. おわりに

本論文では、小学校教員免許取得に係る科目である「体育科教育法」での学生が直面した課題や模擬授業後の省察について、報告してきた。

“はじめに”で述べたように、小学校教員免許取得のために取得すべき体育科に関する指導法関係の最低習得単位数は、極めて少ない状況である。本実践を行った短期大学にあっても小学校体育授業に関する科目は、調査対象となった「体育科教育法」だけである。その限られた15回という講義時数の中で、体育科のどの内容に重みづけを行い、授業を展開させていくかどうかは、大きな課題である。今回、報告を行った学生が直面した課題を参考に授業展開していくことは、効果的な教員養成プログラム開発にとっても、重要な視点となり得ることだろう。

(注1)

小学校学習指導要領体育編では、中学年は「ゴール型ゲーム」、「ネット型ゲーム」、「ベースボール型ゲーム」と記載されている。高学年では、「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」と記載されている。

7. 参考文献

秋田喜代美 (2000) 教師の信念. 日本教育工学会編, 教育工学辞典. 実教出版: 東京, pp. 194-197.

中央教育審議会 (2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申). 文部科学省.

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shinigi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf (参照日2015年12月5日).

藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ (2011) 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の「省察」に着目して—. 体育科教育学研究, 27(1):19-30.

Harris, Jo., Cale, Lorraine., and Musson, Hayley. (2012) The predicament of primary physical education: a consequence of 'insufficient' ITT and 'ineffective' CPD?. Physical Education & Sport Pedagogy (17) Issue 4, 367.

廣兼志保 (2012) 「初等体育科内容構成研究」授業実践報告—教科内容構成研究と教科教育法とのつながりをめざして—. 島根大学教育学部紀要, 45別冊, 59-62.

岸一弘 (2013) 小学校教員養成課程の体育科目における模擬授業の検討—受講生の「授業省察力」の変容に関して—. 共愛学園前橋国際大学論集, 13:39-49.

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は「体育科教育法」における学生の取り組みについて、学生が陥りがちな評価方法の偏りや、教材づくり・指導案作成の際に直面する課題について、学生の作成した授業記録や指導案、グループ指導案、模擬授業後の省察記録から考察したものである。学ぶ側から教える側へと立場の転換を初めて経験する学生が、授業を組み立てていくまでに必要な「気づき」とそれを促す指導法が指摘され、「体育科」における考察であるが、全ての「教科教育法」の授業で同様の「気づきの促し」が必要であることを認識させる論であると思われる。本論が指摘するように、小学校の各教科の理解を深める授業の機会が多いとは言えないので、この知見を共有することで各教科教育法の連携を深め、学生に有益な授業としてゆきたい。

(担当：児童教育学科 三木 麻子)